ブラッセル日本人学校における国際理解教育の実践と考察

前ブラッセル日本人学校教諭
東京学芸大学附属大泉小学校教諭　田代　勝

キーワード：在外教育施設、ブラッセル、国際理解教育、教科指導

赴任校の概要（2023 年 3 月現在）
学校名・日本語：ブラッセル日本人学校
現地表記：The Japanese School of Brussels
児童生徒数：小学部　約 240 人　中学部　約 50 人

1. はじめに

2020 年よりブラッセル日本人学校で教鞭をとる機会をいただいた。赴任直前の新型コロナ拡大により学校の予定は大幅に変更され、当年 4 月よりオンラインでの始業式や学習が始まった。実際に赴任したのは 1 学期終業式直前の 7 月中旬となり、児童生徒と初めて対面したのは 8 月 31 日であった。その後、2021 年度末までベルギーのコロナ対策の規制に従い、社会科見学は殆ど実施できず、学校内でも他学年との交流も限定された。オンライン授業に切り替わることも度々あった。そのためここに報告する内容は、2022 年度の 1 年間に行ったものを中心とし、それまでの 2 年間で私が経験したことを考察の根拠としているものもある。大変少ない事例ではあるが、それらを基に私が学んだことをここに紹介したい。

2. 現地調査

(1) ベルギーの学校教育について

ベルギーでは日本と同じ小学校 6 年、中学校 3 年間が義務教育となる。年度末（6 月）にはテストがあり、50%以上の得点がないと落第となる。進級については学校と相談をして決めるようである。義務教育卒業まで、落第なしで進級する児童生徒は少ないとのことである。日本では落第とは否定的な見方となるが、現地では子どもに合った教育を受けた方がよいとの判断から、大きな問題にはならないようである。ただし近年は、中学校進学のための成績や学力が必要であるとの考え方の保護者も増えているようである。なお、多くの小中学校では水曜日が午前のみの授業となっており、午後に現地クラブ活動等に参加できるようになっている。

中学校進学にあたり、専門的な技能を身に付けるのか、芸術やスポーツ活動を中心にするのか、また大学進学を希望するのかによって、コースが分かれていく。

また、公立学校において、様々な教育プログラム（イエナ、フレネ、イマージョン他）が用意されている。また多言語に対応したコースが開講されている。保護者は学校の特色を理解して子どもに合った学校を選択することができる。入試はないが、定員があるため、希望しても入れない場合がある。

(2) 現地校視察（St. Joseph 小学校）

イエナプランの小学校（幼小併設）

①教育理念・・・異年齢の幼児・児童と学校生活を共にすることによって情緒を安定させ、更にはキャリア教育にもつながる学びを体験させる。仲間意識の高まり、教員との信頼関係を築くこと、意見を受け止める重要性、発信力、意欲的な態度、連帯感、自主性などを育む。

②学び・・・学びの方法を学ぶ。それは、知識を必要に応じて使い分ける能力、見通しを持った学びの手順、現実にある社会的諸課題、また達成するための手立てを考えることであり、St. Joseph の教育内容の中心となる。学習は、集団での仲間とともに、成長段階に応じて、お互いに影響を受ける過程を大切にしている。

③学級編成・・・年齢による（1学年ごとの）グループ分けではなく、2学年を合同にした子どもたちを大きなグループとし、それらを「Horizon」と呼んでいる。

「Horizon」という集団の構成

Horizon	1	2	3	4	5
年齢	2-4	4-6	6-8	8-10	10-12

※日本ではHorizon3～5が小学校に当たる。同じHorizonに2年所属すると次のHorizonに進む。

※それぞれのHorizonでは、異年齢が混ざるように3クラスに分かれている。授業内容によって、3クラス合同にすることもある。常に3人の担任がついている。

④教育施設・・・施設は、活動に応じて、またいくつかのグループの人数に応じて使用することができるようなスペースがある。Horizon毎の学習スペースは、日本で言う学級ごとの仕切り（壁）がなく、オープンで自由度がある。全てフラットなスペースではなく、ところどころに階段があって中2階のような場所があったり、階段の踊り場に児童が自主的に掲示できるスペースがあったりする。St. Josephでは、子どもたちは「自分の」クラスではなく、「プラトー」と呼ばれる大きな空間にHorizon単位で学校生活を過ごしている。

⑤学習方法・・・知識と学習方法を教授すること、及びイエナプランの教育学における学習方法は、自分で選択する個別の作業、グループ作業、自由作業（カスタム プロジェクト）など、さまざまな形を取ることがある。学校生活には、正しい言葉をつかい、喜びを分かち合い、心を穏やかにさせるが、時に教員が厳しく接することがある。パーティーは子どもたちの作品を掲示して、それらを評価し、グループに関わっている有用感を生み出す。それは学習を祝うだけでなく、学習のサイクルの一形態である。

⑥コミュニケーション・・・コミュニケーションと表現は、学校生活の中心と捉えている。対話や発言のために、教員が様々な問いを計画的に準備している。またグループは、Horizon、全校、児童会などがあり、話し合いがスムーズに行われるよう、校舎内には各グループに適したスペースがある。多くはすり鉢状の席配置であり、全員の顔が見られるように工夫されている。個性が尊重されていて、誰でも自由に発言できる。いつもそこでは活発な議論がかわされている。

（以上　見学記録、St. Joseph小学校資料、校長先生より）

(3) 現地校との交流（日本人学校行事）

小学部は各学年で、現地の公立小学校（レイモンド・バン・ベル校）との交流が行われてきた。令和4年度は3年ぶりに交流ができることとなった。今年度は相手校の都合もあり、1年・2年・中学年・高学年がグループになって交流をした。10月、11月にそれぞれの日本人学校児童が訪問し、11月、12月に現地校児童が日本人学校へ来校するという 2 回の交流である。フランス語教諭兼コーディネータの職員が窓口になり、スケジュール設定や目標の提案をした。その中で何のための交流なのかを教員同士で共有し、有意義な交流になるよう計画を進めた。日本人学校に長く在籍している児童も、久しぶりに行われるため忘れてしまったことも多かったようであったが、交流前にはお互いに写真やビデオレターや寄せ書きなどのやりとりをして、お互いの気持ちを高め合った。活動は下記の通りである。

目　標	・フランス語（外国語）の必要感を高める。 ・現地の子どもと触れ合うことで、日本と現地との違いを見つけて異文化を理解し、主体的にコミュニケーションをとろうとする態度をはぐくむ。	
時　期	2022 年 10 月	11 月
場　所	現地校（レイモンド・バン・ベル校）	日本人学校（現地校児童が来校）
グループ	20 人程度の小グループ 4 つと、その中に 2 人組のペアの設定	左記同様だが、2 人組での活動を主とした。
活　動	・動画を見ながらダンス ・ペイント（色付け） ・現地の昔遊び ・現地の鬼ごっこ	・書写（名前） ・折り紙 ・日本の昔遊び（けん玉・お手玉・福笑い他） ・縄跳び

初めに行われた現地校では主に教員が中心となった活動であったが、本校での受け入れでは 2 回目ということもあり、児童が主体となって計画を立て、当日は案内をしたり活動の手本を見せたりした。児童は、ペアの友達と楽しみたいことと日本の文化を伝えたいという 2 つの思いをもって取り組んだ。

児童のふりかえりより言語についての記述が多く見られた。大きく 2 つに分かれ、「もっとフランス語を勉強しておけばよかった」という言語への強い関心を示す児童、そして「言葉が通じなくても仲良くなれることが分かった」という、異文化理解を示す言葉があった。私は、日本人同士が近づいてしまって交流に積極的に参加しない児童が少なからずいるのではないかと予想していた。しかし、そのような児童は 1 人もおらず、児童全員が非常に楽しそうに笑顔で過ごしていた。

⑷ 社会科見学（日本人学校第 4 学年社会科見学）

①単元　　「郷土の伝統・文化と先人たち」

②見学場所；サントル運河・ロンキエール運河（ブリュッセルの南 50㎞ 程の地域）

③見学ルート

サントル運河（Canal du Centre）…観光用の船にて、ロック式の運河とボートリフトの運河を通過した。途中公道の橋が上がったり、動力の施設を見学したりした。実際に水位が上がる時や、ボートリフトでゲートを通過するときなどは子どもたちの歓声が上がった。

ロンキエール運河（The Sloping Lock of Ronquières）…残念ながらその時に通過する船がなく、ベルトコンベアーにあたる部分のみの見学となった。長い斜面を上っていくことは想像できたようである。

④歴史

ヨーロッパの運河建設については、古くより行われてきた。広大で平坦な土地と、ゆったりとした流れの大きな川、そしてその川沿いに都市が建設されたことから、大量の物資を輸送するために船が使われてきた。この辺りは、フランスからの物資をブリュッセルに運ぶため計画が進められ、19 世紀後半より 20 世紀初頭にかけて建設されたものである。この地域は一見平坦ではあるが、緩やかな勾配がありブリュッセル方面に運河をつなぐためには、水位の高い川に船を持ち上げる必要があった。サントル運河では、徐々に船をより高い位置へ運ぶために、複数の運河を建設した。水門をしっかり閉めて水位を上げるロック式のものと、大きな水槽を丸ごと上に上げてしまうボートリフトと呼ばれる運河を建設した。ボートリフトは大変大きな力を必要とするが、1 つの水槽を上げる時に、もう 1 つの水槽を下げる力を利用するという工夫がなされている。当時のものが今も使用されていて、世界遺産にも指定されている。ロンキエール運

河では、ベルトコンベアーのようなもので船を上に運んでいく方式で、そこに水はない。1kmあまりのベルトコンベアーで、一気に高い位置へ船を移動させる。

3. 考察

⑴ 多様性を受け入れることが普通になっている

①現地校視察・現地校との交流より

ブリュッセルは他民族、多言語、他宗教であることから、公立の学校にはそのように多くの違いのある児童が集まっている。交流した児童たちはどの児童を見ても、何の躊躇なくペアやグループの友達に声をかけて笑顔で過ごしていた。日本人学校の児童も現地の児童と同じように誰かを頼ることもなく意欲的に声をかけ、言葉が分からなくても相手の気持ちを理解しようとし、大変スムーズな交流ができていた。やはり日本人も海外生活経験から、自然と異文化理解の資質が育まれるといえるのではないだろうか。その異文化理解とは、多様性を受け入れることと捉えている。

視察した学校では、異学年（年齢）をまとめてHorizonとしていたので、多様性があって当然の世界であった。更にそこでは「学習障害」「発達障害」なども前向きに捉えていて、その児童にふさわしい場所やグループ、活動を与えていると聞いた。

②社会科見学より

フランス、ドイツとの交易が不可欠であった国・地域であることが実感できた。物資はもとより、文化をも受け入れる体制がなければ成り立たなかっただろうと考える。陸続きの国がいくつもある地域は、様々な流通より多様性を受け入れる文化が育まれると感じた。

⑵ 自己肯定感が高められる

①現地校視察より

教科の知識だけを習得する学びではない。好きなことを通じて自然と知識を得たり、困ったときに考えたりすることで思考力が深まる、それが子どもにとって幸せではないかと校長先生がおっしゃっていた。異年齢の集団では、自由な対話によりコミュニケーション能力が高まっている。学校では笑顔に溢れ、楽しく取り組んでいる様子が見られた。そのような場に自己肯定感が育まれると考える。

②現地校との交流、現地生活より

前述の通り、現地校では公立学校であっても、日本でいう私立学校のような特色がある。「保護者（本人）が学校を選ぶ」ということが普通であることも個の自由を大切にしていると考える。公立の学校であれば、大学まで学費は無料である（ただし25歳まで）。なお、進学のための入学試験はなく、学力について人と比較する必要性がないことも大きく働いていると考える。

⑶ 相手を思いやる心

国際理解、異文化理解の柱は「相手を思いやる心」であると実感した。ブリュッセルはEU本部、またNATO本部の所在地である。会議を開くと膨大な時間がかかることもあるという。各国ともに、確たる主張はしているが、同時に他国への理解があるからこそ話し合いが成り立つのではないかと予想する。現地の生活においても、いろいろな人がいて普通であり、言葉が通じなくてもお互いに何とか伝えようとしたり理解しようとしていたりする。バスや電車、時にはスーパーマーケットのストライキも度々発生し、生活に不自由をすることがあるが、人々はそれを批判的には捉えない。ある時、国内で大洪水が起こったことがある。その次の日には、職場の現地講師より支援物資を集める場所などの連絡があった。これらの行動も全て「相手を思いやる心」に繋がっているのではないかと考えた。